

# 忘れ得ぬ人々(五)

## 安枝英紳教授を憶う

同志社大学名誉教授 藤馬龍太郎

忘れもしない二〇〇一年三月二十八日午後八時過ぎ、法学部事務室からの電話で「安枝先生が亡くなられました……」と知らされた。思いがけない計報に私はわが耳を疑い、一瞬茫然、度々失った。翌四月二〇日は彼の第六〇回の誕生日なので、いつも決まって教授会散会後にささやかな飲み会をもった、心を許した数人の悪童達(失礼!)で、還暦の祝宴を計画していた矢先のことであった。

いまもなお「寂寥」から脱しきれない。彼との思い出は尽きない。すぐれた研究者、労働法学者としての彼の業績や研究上の交流について述べることは私の任ではない。しかし同僚として、心友として、彼との交流の思い出は鮮やかに甦ってくる。思いつく限りに綴ってみよう。

安枝さんは、酒を酌み交わしながら、心を許した友との談笑の雰囲気、刻の経つのも忘れることがしばしばあった。しかし一崩れることもなかった。下戸の私(少ししか飲めない癖に、いつでも最終までつきあった)は、半ば呆れ顔で「体のどこかに、アルコールだけ漏れる穴でもあいているんじゃないか」と、よく冷やかしたものであった。彼は黙ってにこにこ笑っていた。

安枝さんは、一九七八年から七九年にかけて、ご家族と一緒にロンドンで在外研究の機会をもった。私もその前年から南仏マルセイユ近郊の閑静な大学町エクス・アン・プロヴァンスにいたが、夏休みを利用して家族三人で、おぼろおぼろステーション・ミミを駆って遙々ロンドンに安枝さんを訪ねた。八月一日にエクスを発つて九月二八日に帰宅する迄、ヨーロッパ縦断の旅で立ち寄った、二二三の都市の印象を点描してみよう。



ローザンヌから、アイガー北壁、メンヒ、ユングフラウと四〇〇〇メートル級が続きスイスアルプスの銀嶺を遠望しながら、インターラーケンに至る。さらにベルン、チューリッヒを走破し、リヒテンシュタインをかすめてドイツに入り、南アルプスを望むミュンヘンに到達する。毎年九月末から十月初めにかけての「オクトーバー・フェスト(ビール祭)」には、時期的に少し早かったが、私達も「アイン・プロジクト(乾杯)」と、ビア・ジョッキが林立する何百というテーブルからの合唱に、いささか気おくれしながら、市の中心マリエン広場近くの体育館のような巨大な世界で最も有名なビアホール「ホーフブロイハウス」の二階(一階は数千人収容可能な大衆酒場)の食堂で夕食をとり、本場のビールを味わった。バルト海に面した古都リューベックに生れた作家トーマス・マンは、二十代を迎えてここミュンヘンに移り住み、ナチスによって祖国を追われ、亡命の旅に

(次頁へ続く)

# ホームページの刷新について

藤馬会会長 福塚 秀彰(70年度生)

「龍のおとし子」が、発刊される、総会の9月27日頃は暑いぶん涼しくなっていることでしょうかね。

今(8月13日)、しばらく、暑くて眠れない夜が続いています。

北京では、オリンピックが、甲子園では、高校野球が、熱気をおびてきています。

今年は、珍しく、夫婦で、短い北海道旅行をしてきました。札幌と関西地方の温度差は、約10度。すごいですね。今回の旅行で、一つ解けた疑問。札幌の街は、なぜ、あの様に、住宅の並びが、ぼつとしているのだらう?という、なんとも表現のし難い感想だったのですが、説明を受けて、なるほど。冬、降り積もった屋根からの雪おろしに、壁等自宅を囲むものは、邪魔になる。(おろした雪を道路に出さねばならない)だから、敷地境界線がはつきりさせるようなものは、はじめから作っていない。さて、会長として、

まず、会員の皆さんにご報告しなければならぬこと。それは、幹事さんの努力で、会が組織らしく整理されてきたことです。

その一端が、総会でもご報告する予定ですが、ホームページの刷新です。ブログまで開設していただきました。もちろん、利用者には、まだまだ、限られています。情報交換に非常な強力な武器になると思っています。(いろいろな使い方のアイデアをお寄せください)

小さいながらも、一つの組織である、藤馬会の運営については、できるだけ、経費のかからない、しかも、皆さんの声を反映できるようにシステムに築き上げるのが、役員の重大な仕事のひとつと思っています。

これから、高齢者社会をむかえる(実は、もうそういう社会に入っている)にあたって、高齢者自身が自分に閉じこもるのではなく、生き生きと生活を楽しむ



# 腹八分目の精神

法貴 隆史（89年度生）

甚だ私事であるが、本  
年上半期にうつ病を発症  
し、三か月にわたり休職  
した。復職を果たした  
6月以降もしばしば欠勤  
し、現在は午前中のみの  
短勤務である。昨年  
不からいくら眠っても疲  
れがとれない、偏頭痛や  
目筋から腰にかけてのひ  
こい凝りを騙し騙し過ご  
していたが3月になり、  
とうとう朝、起きること  
ができなくなった。まさ  
か、という直感に働いた  
が、その日の勤務を休む  
ことにし、医者には掛かっ  
て。すると、典型的な  
うつ病の症状であり、ひ  
まらず一か月仕事を休ん  
ど、何もせずに静養せよ  
という。

これ幸いというズルけ  
に思いつき、多忙な年度末  
に勤務を外れることへの  
ほろめたさも半々に自宅  
で生活が始まった。当  
時はまとまった昼寝の時  
間がもたらえたという程度  
しか考えていなかった  
が、本心にひたすら眠る  
みの毎日、生きる基  
である食欲すら起きな  
い。気晴らしに外出しよ  
うにも太陽の光を浴びる  
だけで眩暈がする。予め  
時を決めて人と会う、

言葉に象徴される今日の  
格差社会・成果至上主  
義は、とかく我々現代人  
の心をなやみ構わずと  
いう方向へと向かわせ、  
本来、人間に求められる  
節度やゆとりを奪ってい  
るように思う。職場のみ  
ならず、家庭をも含め  
た複雑な人間関係の中  
で我々は立ち止まること  
が許されないような強迫  
観念に常に追い立てられ  
ているのかもしれない。  
今般のことで私はうつ

病は誰もが罹りうる病  
気であることを痛感した  
が、吉本興業の池乃め  
だかさんの「よし、今日  
はこのくらいにしといた  
ろー」というギャグを思  
い出した。我々はあらた  
めて、何かを追い、追わ  
れるだけでなく、日本人  
の伝統的精神の一つであ  
る「腹八分目」、「足る  
を知る」という教訓を  
思い出し、節制しながら  
人生を送りたいものであ  
る。

有益な資料を教示いた  
だき、なんとか卒業でき  
た。就職先は、先生が懇  
意にされていた故安枝  
英神先生からご紹介い  
ただいた。会社では、約  
200名のクローバー会幹  
事長として、新入社員  
歓迎会、ゴルフ会を定期  
的に開催し、社外では、  
同志社校友会愛知支部  
常任理事を7年務め、全  
く縁のなかった愛知に幅  
広い人脈ができた。10  
年間の愛知での日々は、  
公私共に、正に同志社と

一体であった。  
そして、昨年、東京に  
きた。先生から国会図  
書館時代の話をよく聞か  
されていたので、それほ  
ど驚くことはなかった。  
新橋のてんぷら、銀座の  
喫茶店、上野の美術館。  
初めて行ってもなんだか  
懐かしい感じがした。  
いつの日か、また、先  
生のご自宅で、樋上慎二  
先輩、渡邊曉彦先輩、  
新島光二君と一献酌み  
交したいものである。



## 藤馬先生と私

増田 剛（91年度生）

藤馬先生との出会いは  
田辺での憲法Iであつ  
た。冷房のない暑い大講  
義室で、きちんとネクタ  
イをされ、私語を交わ  
す不届きな学生を演壇  
から怒鳴りつけながら、  
ばりばりと板書されてい  
た講義を思い出す。オ  
シャレで小柄ながら、おつ

## 「藤馬会のHPとブログを紹介します」

ホームページを新しくしました。

藤馬会総会の案内をはじめ、これまでの総会の写真、東京藤馬会コーナー、一般の方からの問い合わせフォームなどを載せています。

会員間の気軽な情報交換の場として「ブログ」も設けたほか、藤馬先生に今後、ご寄稿いただくコーナーも準備しております。

ご登録いただければ、会員どなたもブログに投稿やコメントなどができます。

600人分のメールアドレス発行にも対応しておりますので、会員お一人ずつに藤馬会専用メールアドレスを発行いたしております。メールはMicrosoft Outlookなどのソフトで使えるほか、Web上でも使えますから、自宅や職場など、場所を選ばず送受信できます。

ブログへの登録ご希望は下記までメールかファクスで、担当役員までお知らせください。お気軽に参加をお待ちしております。

ホームページとブログを、歴史ある会誌「龍のおとし子」ともどもよろしくお願いいたします。

ホームページ <http://tohma-kai.org/>

役員あて メールアドレス [admini@tohma-kai.org](mailto:admini@tohma-kai.org)

fax 0742-51-6819

担当：78年度生 中野 眞一

## 編集後記

「龍のおとし子」編集担当の福田です。

今回は、4名の方にご協力いただき「OB通信」をお届けできることとなりました。みなさんご多忙中のところ、快くお引き受けいただき、この場をお借りしてお礼申し上げます。

また、藤馬先生からは、安枝教授にまつわるエピソードなどご寄稿いただきました。私自身は安枝先生とは接点はなかったのですが、安枝先生の講義を受けられたり、指導を受けた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。とても感慨深い文章を編集人の役で藤馬先生の生原稿で読ませていただきました。

ところで、私事で恐縮ですが、先日、高校の同年次の全体同窓会が高校卒業以来初めて開催され、出席したのですが、いつまでも若々しく変わらない者、頭部や腹部に年輪を感じさせる者など様々でした。ところが、酒が入ると、話題は、男は職場のハードさへの愚痴、女性では子育ての難しさへの愚痴と、どこもかしこも同じような会話を繰り返して、みんな似たようなものなんだなあと思えるやら安心したりやらで、いつの間にか時は経過するのです。

世の中全般がストレス社会なのか、我々の年代がそういう時期なのかわかりませんが、とにかく余裕のない毎日に自身疲れているのが実感です。そういう意味からも法貴さんご寄稿は切実に身に迫りました。

藤馬会の会員の皆様も心身ともに健康で、また来年の藤馬会でお会いできることを祈っております。



（79年度生 福田 幸治）

---

ユトワットガルトから前  
に連なる風光明媚な  
山岳地帯シヴァルツァ  
ー(黒い森)を抜ける  
「ドイツ人が「われら  
父なるライン」(unser  
ater Rhein)と愛称す  
る独仏国境を画するライ  
川(彼らはまた「ドナ  
川を、母なるドナウ  
川」と突当り、カー  
スルーに着く。ここに  
は連邦憲法裁判所があ  
る。見事なまでに簡素な  
建物で、それでいてど  
品位のある近づきやす  
き雰囲気のある建物であ  
る。警備の職員も私達  
参観者に対しても極めて  
こやかな態度で、好感  
をもてる。わが最高裁の  
庁舎に比較して格段の相  
違。容れものは、必ずし  
もその内容を現わすもの  
はない典型的な見本と  
うべきか。さらにライ  
川に沿って北上して大  
都市ハイデルベルグへ。  
この「ハイデルベルグ」の  
石を郷愁をもつて聞く世  
には、すでに遠くなつて  
しまった。二十世紀初頭  
から半ばにかけて一世を  
轟かし、世界の青年たち  
に青春讃歌でもあったあ  
「マイヤー・フェルスター」  
の「アルト・ハイデルベルグ」  
(一九〇一)を「ご存知  
なうか。ある架空の小  
説の皇太子カール・ハ  
ーリツのハイデルベルグ  
大学での自由奔放な学  
生仲間との生活、彼の下  
宿先のカフェで働く町  
娘ケーティとの身分ちが

離の悲恋物語に思いを馳  
せながら、古きよき時  
代の典型的な大学の面  
影を色濃く遺す大学町  
を歩く。かつての日本で  
は、哲学や文学を学ぶ者  
にとつて「ハイデルベルグ  
は、一種の憧れ、いや信  
仰の地ですらあった。早  
速、ハイデルベルグ城へ。  
その崖下を流れるネッカ  
川、一八世紀末に造られ  
た旧橋(カール・テオ  
ドル橋)が兩岸を結び、  
対岸の小さい丘の中腹  
に、文豪ゲーテや、一時、  
ここで教鞭をとつた哲  
学者ヘーゲルも、思索に  
耽りながら歩いたとい  
う哲学者の道がある。  
京都東山山麓・銀閣寺  
から法然院に通じる疎水  
べりが「哲学の道」とし  
て知られているが、その  
由来はここにある(龍の  
おとし子」第一七号)。  
ここから眺める古城は絶  
景、一瞬息を呑む。翌  
日、一三八六年創立のド  
イツ最古の大学、ハイデル  
ベルグ大学へ。あの有名  
な「学生牢(Karzer)」  
はとりわけ印象的であつ  
た。学生が校則を破つた  
り、酔つて喧嘩をすると、  
学生自治組織の「裁判」  
にかけられて入牢を宣告  
される。一七七八年から  
一九一四年迄実際に使  
用されていたという。壁  
から天井まで一面にびっ  
しりと学生達による絢  
爛豪華(?)な落書や  
名前が遺されている。奇  
妙なことに高々、酔つ払つ

収容される学生にとつて  
は、一つの見得になり、  
むしろ学生間で幅がき  
く始末、誇りですらあつ  
たという。大学の講義時  
間が始まると出獄して  
聴講が許され、終わると  
再び入牢したと聞く。  
私はこれを見て、ここに  
遺されている落書をした  
学生の一人一人がその後  
どんな人生を歩んだのか  
……と、まことに興味  
津々たるものがあつた。  
古きよき大学自治の古  
典的時代の記念物であ  
り、改めて大学自治や学  
内規律について考えさせ  
られた。歌人斎藤茂吉に  
「古くより大学街の名  
に負える此石室に学生の  
楽書も見つ」の一首があ  
る。ミュンヘンに留学し  
いた茂吉が、大正十三年  
(一九二四年)六月、  
三年間の留学を終える前  
にここに立寄つたときのも  
のである。

マインツからコブレンツ  
迄ライン下りの遊覧船に  
乗る。八月中旬というの  
にやけに寒い。震えなが  
らデッキから兩岸に展開  
する数々の古城のパラマ  
やローレライの岩を眺め  
て、あのハイネの詩「な  
じかは知らねど心わびて  
昔の伝説はそぞろ身に  
しむ／＼と暮れゆく、  
ラインの流……」という  
馴染み深い、哀愁を帯び  
た美しいメロディが口をつ  
いて出る。コブレンツから  
再び愛車でボンに入る。  
当時ここは西独の首都、  
員会館の一際高層の立  
派な建物が目につく。こ  
こはベートーヴェン生誕の  
地、彼の生家が記念館  
ベートーヴェン・ハウスと  
なっている。あの偉大な  
楽聖が、難聴に苦渋し、  
苦難と孤独な五六歳、  
目の下の辺りはくぼみ、  
頬はげつそりとこけ落ち  
て、生前の強固な意思  
の人の面影もなく、石  
膏のデスマスクとしてガラ  
スクースの中で眠っている  
のをみていると、「Meh  
「John」(「もつと光りを」  
という彼の言葉が頭から  
離れなかった。  
ケルンの大聖堂を左手  
にみて、アウトバーンに入  
り、デュセルドルフ・ハン  
ブルグ・リユーベックと立寄  
りながら、国境を越えて  
デンマークのコペンハーゲン  
へ「チボリ公園や、人魚  
の像」をみて二泊。再び  
東独との国境の町リユー  
ベックに戻る。さらにオ  
ランダ・ベルギーを経て、  
オステンドからフェリーで  
ドーヴァ海峡をイギリスの  
港町ドーヴァーへ向けて三時  
間の船旅である。九月一  
日に、ようやく目的地ロ  
ンドン郊外に辿り着く。  
閑静なベッケンハム・オー  
クヒルの安枝邸を訪ね  
る。その際お世話になつ  
たことが忘れられない。  
安枝邸は庭つき二階建の  
瀟洒な館、エックスの茅  
屋とは比すべきもなし。  
長途の疲れをいやすべく、  
ご夫婦より強くお勧めを  
受け、厚顔にも一泊させ

# 第21回 藤馬会 総会 スポッツ集



第21回 藤馬会